

## 資本主義の存立条件

### 〈マルクスの学説における資本主義の本質的な標識＝商品経済の一般化〉

マルクスの学説によれば、資本主義の本質的な標識はつぎのとおりである。(一) 生産の一般的形態としての商品生産。生産物は、種々さまざまな社会的生産有機体のなかで商品形態をとるが、資本主義的生産においてはじめて、労働生産物のこのような形態は、例外的なもの、個別的なもの、偶然的なものではなく、一般的なものとなる。資本主義の第二の標識は、(二) 労働生産物ばかりでなく、労働そのものも、すなわち人間の労働力も商品形態をとる、ということである。労働力の商品形態の発展の程度は、資本主義の発展の程度を特徴づける。

注)『資本論』第二巻(1885年)九三ページ。[第四章、111~112ページ]——マルクスは、ここにあげた箇所だけして資本主義の定義をあたえているのではないということ、あらかじめ言うておく必要がある。彼は一般的にいて定義をあたえることはなかった。ここではただ、商品生産の資本主義的生産にたいする関係が指摘されているだけであって、本文で言っているのも、そのことである。

第一巻 ナロードニキ主義の経済学的内容 P471,473

## コメント

資本主義的生産は商品となることを前提として生産物を生産し、その生産物をつくるための人間の労働力をも商品に変える。

### 〈労働の疎外〉

われわれが第四章で見たように、貨幣を資本に転化させるためには、商品生産(第四版では、価値生産、となっている。)と商品流通とが存在するだけでは足りなかった。まず第一に、一方には価値または貨幣の所持者、他方には価値を創造する実体の所持者が、一方には生産手段とが、互いに買い手と売り手として相対していなければならなかった。つまり、労働生産物と労働そのものとの分離、客体的な労働条件と主体的な労働力との分離が、資本主義的生産過程の事実的に与えられた基礎であり出発点だったのである。

ところが、はじめはただ出発点でしかなかったものが、過程の単なる連続、単純再生産によって、資本主義的生産の特有な結果として絶えず繰り返し生産されて永久化されるのである。一方では生産過程は絶えず素材的富を資本に転化させ、資本家のための価値増殖手段と享楽手段とに転化させる。他方ではこの過程から絶えず労働者が、そこにはいつかと同じ姿で——富の人的源泉ではあるがこの富を自分のために実現するあらゆる手段を失っている姿で——出てくる。彼がこの過程にはいる前に、彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家のものとされ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程のなかで絶えず他人の生産物に対象化されるのである。生産過程は同時に資本家が労働力を消費する過程でもあるのだから、労働者の生産物は、絶えず商品に転化するだけでなく、資本に、すなわち価値を創造する力を搾取する価値に、人身を買う生活手段に、生産者を使用する生産手段に、転化するのである。

資本論(大月版) 第一巻 第7篇 資本の蓄積過程 第21章 単純再生産 P742~743

## コメント

資本主義的生産は、生産手段の所持者と労働力だけの所持者との存在を基礎とする。労働者は労働力を売ることにより、その生産物は資本家のものとなり、その労働は彼から疎外され、自分の創造物が自分を搾取する価値として自らをますます資本にしばりつける。

### 〈自由競争〉

資本の内的諸法則——それは資本の発展の歴史的な初期段階においてはたんに傾向として現れるにすぎない——は、自由競争が発展するかぎり、またその範囲内で、はじめて法則として措定されるのであり、またそのかぎりでのみ、資本にもとづく生産が自分に適合した諸形態をとる。というのは、自由競争は資本にもとづく生産様式の自由な発展であり、資本の諸条件とこれらの諸条件をたえず再生産する過程としての資本の諸条件との自由な発展であるからである。……資本が弱いあいだは、資本そのものが、過去の・すなわち資本の出現とともに消え去りつつある・生産諸様式のささえをもとめる。自分を強力なものと感じるようになると、資本はこのささえを投げ捨て、自分自身の諸法則に従って運動する。資本が自分自身を発展の制限であると感じ意識しはじめると、資本は次のような諸形態に、すなわち、自由競争の抑制によって、資本の支配を完成するようにみえながら、同時に資本の解体の、また資本にもとづく生産様式の解体の告知者でもある諸形態に、逃げ場をもとめる。……いずれにせよ、競争を自由な個性のいわゆる絶対的な形態とみる幻想が消えさるならば、このことは、競争の諸条件、すなわち資本にもとづく生産の諸条件が、すでに制限として感じられ考えられているということ、したがってまた、すでに制限となっており、またますますそうなるということの証拠である。

マルクス経済学レキシコンⅤ P31~33 マルクス『経済学批判要綱』Ⅲ、P599-602

## コメント

資本は自分自身の発展限界を感じると、資本の発展の前提である自由競争を自ら抑制し、擬似的な計画経済によって利益をみんなで分け合うようになる。しかし、このことは、自由競争を前提とし、競争を自由な個性のいわゆる絶対的な形態とみる資本主義の幻想を消し去り、資本主義の存在意義を失わせる。資本主義の進歩性は自由競争の中でのみ発揮される。

### 〈労働の再生産費の保障〉

われわれがすでに見たように、これまでのすべての社会は、抑圧する階級と抑圧される階級との対立のうえに立っていた。だが、一つの階級を抑圧することができるためには、その階級が、すくなくとも奴隷としての生存を保っていただけるだけの条件が保証されていなければならない。農奴は農奴制のもとで努力してコミュニンの成員に成り上がったし、同様に、小市民は封建的絶対主義のくびきのもとで努力してブルジョアに成り上がった。これに反して近代の労働者は、工業の進歩につれて向上しないで、自分自身の階級の諸条件を下まわってますます深く沈んでいく。労働者は窮民となり、貧困は人口や富の増大より

もいっそう急速に増大する。こうして、ブルジョアジーが、もはやこれ以上社会の支配階級にとどまって、自分の階級の生活諸条件を規制的な法則として社会に押しつける能力をもたないことが、明らかになる。彼らが支配する能力をもたない、というのは、自分の奴隷にその奴隷制のなかでの生存をさえ保証する能力がないからである。彼らが奴隷に養ってもらうのではなく、かえって彼らのほうで奴隷を養わなければならないような状態に、奴隷を落とさざるをえないからである。社会は、もはやブルジョアジーのもとでは生きていくことができない。いいかえれば、ブルジョアジーの生存は、もはや社会とあいられない。〔マルクス経済学レキシコンIV P225 III.『共産党宣言』における唯物史観の展開〕

## コメント

抑圧する階級と抑圧される階級との対立のうえに立つこれまでのすべての社会は、抑圧階級が被抑圧階級の生存条件を保証してきた。しかし、資本主義は労働者の貧困化を必然にする。現代日本は、低賃金、不安定雇用の増大により人口減さえもが始まりつつあり、ブルジョアジーの生存が、もはや社会とあいられない状態となりつつある。

「各人は自分のために、神だけが万人のために」

第28巻 P425,475

という行動原理に基づく資本主義社会を終わらせる 때가近づいている。